



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アスペルガー症候群者の社会生活における自助的活動の促進
Author(s)	関本, 正子
Citation	Sauvage : 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 6, 43-52
Issue Date	2010-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42872
Type	departmental bulletin paper
File Information	Sau6_003.pdf



アスペルガー症候群者の社会生活における自助的活動の促進

関本 正子

国際広報メディア専攻 博士後期課程

ms@imc.hokudai.ac.jp, hiyoko7sky@nifty.com

1. はじめに

アスペルガー症候群とは、他者の気持ちの推察などに困難性のある障害であり、その結果としてコミュニケーションに問題が生じたり、対人関係に支障をきたしたりする。「知的障害のない自閉症」といわれることもあり、障害特性から生じる違和感のある言動に対して、幼児期から非難を浴び続けている当事者も多い。一般には、年齢を経るごとに人間の対人能力はあがっていく。しかし、アスペルガー症候群者の場合、当事者の意図的な努力なしに社会における有徴性が軽減されていくことは障害特性からいってまれである。

ゴッフマンは、「われわれが期待していたものとは違う望ましくない¹特異性」のことを「スティグマ」と称した²。ゴッフマンは、スティグマのある人がどのような社会的地位におかれるかを詳細に検討しており、スティグマのある人が常人³として自己を提示しようとする努力のことを「正常を装うこと」⁴と表現している。

アスペルガー症候群者のなかには周囲に与える自身の印象を操作し、生きやすくするために社会的に望ましいとされる行動様式を身につけたいと考えている者も存在する。しかし、このことは必ずしも障害を恥とらえていることの証明とはならない。アスペルガー症候群当事者であるニキ氏は、自身の Web サイトに以下のように書いている。

軽度障害者が〈健常者で通してしまおう〉という戦略を採用しているからといって、それが必ずしも、〈自分の障害を恥ずかしく思っているから〉とか、〈健常者の方が価値が上だと思っているから〉とか、〈健常者に同一化したいと思っているから〉とは限りません。⁵

澁谷はろう者を対象にした研究において「声の規範」という概念を掲げ⁶、聴覚障害により規範を逸脱した発音をせざるをえない者の周囲で生じる摩擦について、聴者がろう者の声をスティグマにするのであって、ろう者が自身の声を望ましくないと考えているわけではないという点について考察を行なっている。スティグマとは、あくまで「属性ではなくて関係を表現する言葉」⁷であるといえよう。

アスペルガー症候群は身体障害ではないため、障害を公表しない時はむろんのこと、時には公表してさえその特性や定型発達者との差異を説明することは容易ではない。そのため努力不足や甘えを指摘されたり、自己卑下や反省を強要されるケースも少なくない。

成人期以降にアスペルガー症候群と診断された Chargeup 氏は、そういった状況をブログにおいて以下のように描写している。

定型発達者はこういう理由で変な言葉を使うのだ、理由がわからないのもあるけどとにかく変なのだ、それを理解してあげないといけないのだ、というような。こう書くと「反省がない」「人を責める前に自分が改めるべき」と襲撃されそうです。かといって「理解して欲しい」と下手に出ると甘えだ甘えだと攻撃されるので、まともに受け取ってられません。⁸

聴覚障害者のなかには、自らを日本語とは異なる言語（日本手話）と文化を有する少数者ととらえているグループもある⁹。このことは、非障害者が多数を占める社会のなかでろう者がろうとして生きていくうえでアイデンティティの確立と維持に重要な役割を果たしている。アスペルガー症候群者のなかにも、自閉も文化ととらえるという考え方がある¹⁰。しかし、アスペルガー症候群者の場合、話し言葉、書き言葉ともに定型発達者と同じ言語を使用しており、このことが問題を一層わかりにくくしているという側面がある。

表面的には問題なく独力で生活できている成人アスペルガー症候群者にとって、社会生活において目立たない行動様式を身につけることは利益が大きい。アスペルガー症候群者のスティグマ低減に対して援助がなされてこなかったわけではなく、ソーシャルスキルトレーニング¹¹をはじめ様々な支援が考案され実施されてきた。しかし、専門職者による援助プログラムに参加すること自体が敷居となることも事実であり、ひとりで気軽に実施可能なソーシャルスキル向上の方策が必要とされている。

例えば、アスペルガー症候群者のなかには定型発達者の行動パターンやモチベーションを知るための資料として文芸作品を利用している者がいる。こういった試みは、現実社会との齟齬において批判があるかもしれない。しかし、ニキ氏は以下のように述べている。

テレビや小説を通して学習することに反対する人は、「現実はもっと複雑だぞ」といわれるでしょう。たしかに、世の中に本当にパターンがそれしかないと思ってしまったら困るでしょう。でも、テレビや小説は下準備、そこで学んだことをあとあと応用できる、ということは確かにあるんです。¹²

音声より視覚情報を好む傾向や、目線や会話の間、姿勢などといった非言語的な情報の読み取りが苦手なアスペルガー症候群者にとって、そういったすべてが文章で記述されている小説はメリットの大きいツールである。

2. 情報を操作する手立てとしての「指標」

ゴッフマンは、「秘密の欠点をもつ人が、自己に関する致命的な情報を処理するに際して使う通常の手立て」として、「スティグマのシンボルとなっているさまざまな信号を匿す」あるいは「痕跡をなくしてしまう」例を示している¹³。

アスペルガー症候群者が信号を消す、もしくは隠すためには、定型発達者のようにふるまう必要がある。定型発達者のふるまいに関する情報は、アスペルガー症候群者にとって自尊心を維持しながら生活していくうえで必要不可欠なものである。アスペルガー症候群者のブログでは、定型発達者の行動パターンを解明し、そういった情報を利用して人目をひかないようふるまうための指標を作成しようとする試

みが頻繁になされている。

企業のなかで技術職として働くとうふ氏は、ブログにおいて様々な人の意見を参考にしながら、そういった指標を模索している。

先日社内でパーティーがあった。前の上司を遠くに見かけたので、同僚と「前の上司の所に後で挨拶へいこう」と話していた。(中略)自分は不適切なタイミングで話に行こうとしてしまったわけだ。(中略)パーティーで話したい人がいたとき、

- ・話に行っても良いタイミング
- ・話に行っては悪いタイミング

はどういうタイミングなのだろう。¹⁴

アメリカ在住のアスペルガー症候群者であるホリデーは、自伝のなかで学生時代を以下のように回想している。

グループの仲間たちが彼らなりのルールをもっているらしいことは、私にもわかっていて。みんなが自分自身に課しているルール、グループに課しているルール、どちらもしっかり意識していた。特にふるまい方に関するルール、人との接し方に関するルールは気をつけて観察していた。わけはわからないなりに、とにかくそういうものなんだなと納得する気持ちが半分、理由を知りたいという好奇心が半分で、みんなの行動をひたすらに観察しては、微妙なニュアンスのちがいに基づいて分類し、頭のなかの回転式ファイルに収容していくのだった。¹⁵

社会生活上で起きるすべての出来事を個別に分類していく作業は膨大であり、こうした問題点についての指摘もでるであろう。しかし、行動指標を作成することの効率の悪さを認識しながらも、指標はアスペルガー症候群者から切実に求められている。人間の心理は複雑系の最たるものであり、絶対的に適切なふるまい、正しい指標は存在しない。しかし、指標の妥当性や信頼性を科学的に証明することは不可能であるにもかかわらず、社会的に望ましい／望ましくないふるまいについて何らかの共通性や普遍性を社会全体で模索することは無駄ではない。そして、それらを参考にすることによって、アスペルガー症候群者がスティグマを目立たなくすることは不可能ではないはずである。

3. 普遍性の高い素材を求めて

小説は、人間が周囲の人に対して抱く繊細な気分の変化について熟知している人材、人間観察に秀でた才能をもつものによって創造される。人間の感情の機敏を読むに優れた書き手によって生み出された傑作は、年代、文化の違いを越えて多くの読者の共感的理解をえている。例えば、『高慢と偏見』¹⁶は1813年の発表以来、世界各国で多数の読者に愛されてきた小説である。発表から200年近くを経ても、時代と国を超え多くの人々の共感をえることに成功している。

『高慢と偏見』のように女性の視点で描かれ、女性を主たる読者とする小説を選んだ理由としては、アスペルガー症候群の特徴である堅苦しい言葉づかいや協調性の低さなどが一般的に男性的であるとされており、女性アスペルガー症候群者のほ

うが男性当事者より社会における有徴性が高くなりがちであるという判断からである。実際、自伝にしてもブログにしても、アスペルガー症候群当事者による著作は女性によるものが多く、社会における有徴性の高さや苦悩の深さとの関係性がうかがえる。

『高慢と偏見』は社会生活における行動規範が強固な時代を背景に描かれた作品であり、明文化されたルールの順守を得意とするアスペルガー症候群者にとって得意とする背景であることを付け加えておく。同様に行動規範の厳しい時代に書かれた『ジェーン・エア』¹⁷や『嵐が丘』¹⁸などとは違い、『高慢と偏見』には大きな事件や激しい愛憎劇、特異な状況などは起こらない。他人の凡庸な日常をのぞき見するような作品である点も、日々の生活における行動指標を探るに適した作品であるといえよう。職場のように役割のある場面より社交の時間のほうが望ましいふるまいの指針を決めることは難しいため¹⁹、労働場面に関する記述のない『高慢と偏見』は、この点においても有用である。

なお、女性の社会的権利が十分に保護されていなかった時代の題材を用いることに、アスペルガー症候群の女性に対してそういった時代の女性のようにふるまうことを期待する意図はない。個人の思想と社会的なふるまいが必ずしも一致しないのと同様に、アスペルガー症候群者も自身の価値観や倫理観と言動を厳密に一致させる必要はなく、むしろそういった過度の誠実さもアスペルガー症候群者の障害特性のひとつであるといえる。

「望ましい／望ましくないふるまい」の分類モデルが道徳的な規準ではなく社会における人づきあいや処世術上のものであることを断ったうえで、いつの時代、どこの国、どんな社会においても望ましいと認識されるであろう行動の指標を小説という題材からあぶりだす方法について検討する。

4. 対人関係素の構造

対人場面における人間関係のパターンや変種は、無限にある。厳密に分類を行なおうとすれば、望ましい／望ましくないふるまいの指標が非常に複雑なものとなることは既に指摘した。しかし、カテゴリが多くなるとアスペルガー症候群者が実生活において指標を活用してスティグマの軽減をはかる方略は、現実的ではなくなる。アスペルガー症候群者が利用可能なものとするためには、瞬時に判断可能な単純化された指標が必要となる。人間関係を単純に説明することは現実に即さないという意見もあるかもしれない。しかし、それは無意識かつ即時に社会的に望ましいふるまいを判断し行動できる定型発達者の視点であり、アスペルガー症候群者にとっては単純な指標であったとしても、その活用にはトレーニングが必要となるであろう。

物語のなかの要素を体系的に分類する試みとしては、レヴィ＝ストロースの「神話学」がある²⁰。本論においては、レヴィ＝ストロースが「神話学」で用いた方法を応用して行動指標の作成を試みている。神話学では物語を構成する最小の単位を「神話素」と名付け、軸を設けて神話素の対立構造を明らかにすることにより神話を説き明かしている²¹。本論では、対人関係における出来事の単位を「対人関係素」と名付け、対人関係素が望ましい／望ましくない印象をもたらす条件について論じる。

対人関係素を分類するためのカテゴリは、「どういった場における行動であるかを示す『場面軸』」と、「対人関係における行動基準を何に求めるかを示す『基準軸』」

の2軸を用いて分割することとする。神話学では、軸をはさんで神話素が対立構造を形づくっていくが、本論の指標では2軸は直角に交わり、対人関係素は中心点を境に両端へと離れていくにつれて対立関係が高まるという構造をもつ。

『場面軸』は「公衆の場」と「私的な場」という極をもち、「公衆の場」とは不特定多数の人が集まる何らかの秩序のある場のこととする。一方、「私的な場」は既にある種の関係性が存在する人間同士が存在する場と定義する。『基準軸』は、「規範」と「感情」という極をもち、「規範」は社会のルール、枠組みや共通の認識のこととする。人間社会においては、あらゆる場面において規範に従ってふるまうことが周囲に良い印象を与えるわけではない。規範に沿った行動も時には慇懃無礼なふるまいととられることもある。他方、感情とは原始的かつ本能的なエネルギーであり、対人関係を劇的に変化させる力をもち、感情にしたがったふるまいは型破りな魅力とうつつることもあるかわりに、非常識ととられることもある。

これら場面軸、基準軸に加え、ふるまいを言語的なものと非言語的なものとに分類する「表現軸」を付け加えたものが本論における対人関係の指標である。

アスペルガー症候群者が定型発達者社会における対人関係におけるルールを自身のなかで整理していくためには時間を要することを想定し、場面軸と基準軸の2軸のみを用いたものを「理解するための指標」として次章で、6章においては表現軸を用いた、実際に「行動するための指標」について説明する。その際、人間を描いた普遍性の高い素材として、『高慢と偏見』を一例として説明を行なうこととする。

なお、本論では女性のアスペルガー症候群者を主たる対象とした援助を想定しているが、望ましい／望ましくないふるまいの普遍性を探る分類に男性と女性の差はないという判断から、男性の登場人物の対人関係素も扱っている。

5. 場面と基準

5. 1 公衆の場面における規範を基準としたふるまい

公衆の場面では、その集まりの目的と機能に沿ったふるまいが望ましいと判断されやすい。規範に沿った行動は、行為者のイメージの損傷を最小限に食い止める働きをもつ。

『高慢と偏見』には、舞踏会が公衆の場として何度となくあらわれる。舞踏会とは晴れの席であり、現代におきかえると職場や行事への出席などにあたるといえよう。最初に登場する舞踏会においてビングリー氏のふるまいは「陽気で気さくで、誰とでも踊り」²²と好感をえており、舞踏会では「陽気」「気さく」「誰とでも踊る」などが規範に沿ったふるまいであると示唆されている。一方、ダーシー氏は「ちっとも楽しそうな顔をしない」²³「ほかの女性たちに紹介されるのを断り・・・自分の仲間と話をするだけ」²⁴と書かれており、舞踏会の行動規範をことごとく無視した結果、周囲の反感を買っている。

ジェーンの舞踏会でのふるまいが良い評判をえているのも、ジェーンが舞踏会で「にこにこしすぎる」²⁵ほどに笑顔でいること、初対面のビングリー姉妹にも始終微笑みかけていることが舞踏会の目的と機能にそっていたからであると判断できる。

5. 2 私的な場面における規範を基準としたふるまい

私的な場面とは、親しさや友情、愛情、血縁関係などを再確認し、関係性を深める場であるといえよう。こういった場で丁寧なふるまい過ぎると、コリンズ氏のよ

うに堅苦しい、もったいぶっているなどと評され²⁶、望ましくないと認識されやすい。

過度の丁寧さだけではなく、知的な意見も私的な場においては人を遠ざける。メアリーは家庭のような極めて私的な場面においてさえ常に分別くさく、規範的な意見を述べることによって周囲から浮いた存在となってしまっている。

またリディアは、結婚後はじめて実家に帰省した際、一番年少であるにもかかわらず既婚婦人として姉たちより上席につくことを主張し²⁷家族のひんしゆくをかつている。家庭という私的な場での規範の主張である点に加え、これまで一切の規範を無視してきたリディアによる突然の社会規範の主張である点が、作中人物だけでなく読者の目にも利己的にうつると同時に、やや滑稽な印象をも与えている。

5. 3 公衆の場面における感情を基準としたふるまい

公衆の場で、ジェーンとエリザベスを除くベネット家の人々が感情のおもむくままにふるまっている様は、ダーシー氏から「目を覆いたくなるような下品なふるまい」²⁸と強く批判されており、公衆の場面において規範を無視してふるまうことの危険性を示している。

メアリーが、舞踏会で独唱し続けようとして非難を浴びる場面がある²⁹。舞踏会で歌うこと自体に問題がないにもかかわらず、気さくに人と話す、誰とでも踊るなどの舞踏会における行動規範の一切を無視したうえで思いのままに歌い続けようとした結果、メアリーは家族を恥じ入らせてしまっている。リディアやキティーは会話やダンスには積極的に参加しており、少なくとも舞踏会の目的に沿った行動はとっている。しかし、メアリーのふるまいは舞踏会に参加する意義を根本的に否定しているかのような印象を周囲に与えてしまっており、結果として本来地味な存在であるにもかかわらず悪く目立ってしまったといえよう。

5. 4 私的な場面における感情を基準としたふるまい

私的な場面における感情の発露は、相手から「遠慮のなさ」や「厚かましき」と取られる可能性がある。私的な場での感情を基準としたふるまいについて周囲に望ましいと感じてもらうためには、公共の場では規範にそったふるまいのできる人物であることを事前に印象づけておくことが必要である。

エリザベスは、作中人物からも、また作者であるジェイン・オースティンにも「正直言って私も、彼女はこれまで活字になったどんな人物よりも魅力的だと思いますし、少なくとも彼女を気に入ってくれない読者は許せそうにない」³⁰と、場面に応じて臨機応変に適切な行動のとれる精神的にバランスの取れた感じのいい女性であるとされている。

そのエリザベスも、ダーシー氏からプロポーズされた時には激しく感情をあらわにしている。はじめて愛を告白するという極めて私的な場面において、ダーシー氏が身分や家柄の釣り合いという結婚における規範を全面に押し出した結果、エリザベスは「怒りに顔を真っ赤にして」³¹申し出を拒絶している。エリザベスは、ダーシー氏の家柄や身分に臆することなく、その場が結婚以前の恋愛という私的な段階であるという判断のもと感じたままを述べることによって、読者の、そしてダーシー氏の愛情をも最終的に勝ち取ることに成功した。

このように、私的な場面において感情にのっとなってふるまうことは、自己の存在を尊重する姿勢と解釈され、口論のようなものに発展したとしてさえ好意的にとらえられうるといえよう。

6. 表現とふるまい

6. 1 言語的なメッセージの功罪

言語的に伝えて失敗した例として、リディアが駆け落ちした直後のメアリーの言動をあげたい。

「ほんとうに不幸な事件ね。きっとたいへんな評判になるわ。でも、私たちが悪意の流れをせきとめて、お互いの傷ついた姉妹愛という癒しの香油を注がなくてははいけないわ」³²

エリザベスが反応しなかったためにメアリーはさらに言葉をつのらせ、エリザベスを不快な気分させている。映画やテレビドラマなどでも、悲しみや同情は言葉で直接的に表現するより涙や身体的接触、表情、無言などで表現されることが多く、エリザベスの反応は悲しみや同情は言葉を用いずに伝えたほうが望ましいと判断される可能性が高い。

同情や悲しみと比較して、喜びや楽しさは言語的なメッセージによる表現が好まれやすい。好意を言葉や態度で伝えて望ましくないふるまいであると認識される可能性は低い。コリンズ氏は、不適切な発言により舞踏会の女主人であるフィリップ夫人に不快感を与えそうになった³³にもかかわらず、言葉で畳みかけるように相手を称賛することによってことなきをえている。

このように、言語的なメッセージによる同情や悲しみの伝達は相手を傷ついたり問題を深くしやすく、肯定的な明るいメッセージの言語的な表現は生じかけた問題を消滅させるほどの働きをもつといえよう。

6. 2 非言語的なメッセージの功罪

自身の意図を相手に伝えることが得意な人物として、ウィッカム氏がいる。賭博による多額の借金や駆け落ちなど無責任な性向の人物であるにもかかわらず、ウィッカム氏はコミュニケーション能力の高い人材として描かれている。ウィッカム氏は当初、ロングボーン村の人々に非常な好感をもって迎えられた。

言にくい話をする場合は言葉をつかえさせる、暗い表情をするなど非言語的なメッセージの伝達スキルが高いウィッカム氏は、好人物であるとの印象を広く強く多くの人に与えることができた。当然手に入るはずであった牧師職と聖書禄をダーシー氏が奪ったかのようにエリザベスに信じさせる場面において、ウィッカム氏は「ためらいがちに」³⁴話し始めており、話に信じよう性をもたせることに成功している。のちにエリザベスは、あんなぶしつけな話を何故信じたのかと自身をいぶかしんでいるが³⁵、非言語的なメッセージの効果の大きさを垣間見ることのできるエピソードである。

ウィッカム氏の実像を知ったエリザベスは、ダーシー氏とウィッカム氏を比較して、ジェーンに以下のように述べている。

「片方は善人そうに見えて善人ではなく、もう片方は善人そうに見えないのに善人で・・・」³⁶

場面や基準に合わせて自在にメッセージの表現方法を制御できるウィッカム氏が

望ましいふるまいの多い善人に見られ、親切で信頼できる人物であるダーシー氏に対して多くの人が望ましくないという評価を与えていることは、アスペルガー症候群者が定型発達者の世界観を知るために有益な情報のひとつであるといえよう。

7. 考 察

小説は、その世界に入り込み、登場人物に感情移入しながら読むのが一般的であり、アスペルガー症候群者もそういった読み方を楽しんでいる³⁷。しかし、そういった楽しみ方とは別に、作中人物のふるまいを条件に照らしつつ日常生活の対人関係のパターンにあてはめながら分類して読むという方法もある。小説は、安価で長時間楽しめる娯楽であると同時に、ひとりで落ち着いて取り組める人間社会の資料であり、人疲れしやすいアスペルガー症候群者にとって扱いやすい素材であるといえよう。

アスペルガー症候群者に対するこれまでのソーシャルスキル支援は、定型発達者とその障害特性を観察、分析、研究し、体系化しながら解決策やトレーニング方法を提示、実施していく方法が主流であった。しかし、「研究者や援助者が適切な支援を検討する」時代から、障害者自身による「当事者研究」³⁸の方向へと、援助の主体も多様性をもつに至った現在、これまでとは異なる手法も必要とされている。

スティグマは、スティグマがあるとされている者とそうでない者のあいだにおいて反転しうる特性であり、固定的なものではない。定型発達者がアスペルガー症候群者の対人関係に特徴的なものを感じているのと同様に、アスペルガー症候群者も定型発達者の対人姿勢に違和感をおぼえており、その有徴性は等価である。アスペルガー症候群者は定型発達者の対人関係素の構造に興味をもち、その謎を解き明かしたいと願っている。にもかかわらず、定型発達者の対人関係のあり方は、アスペルガー症候群者が理解できる形では解明、提供されているとはいえない。

アスペルガー症候群者のなかには書記言語に強い者が多く存在するため、ブログや Web サイトを通じての活動は、アスペルガー症候群者の定型発達者研究³⁹を飛躍的に発展させつつある。こういった経緯を踏まえ、本論では当事者によって書かれた自伝やエッセイなどに加え、ブログや Web サイトを例にアスペルガー症候群者のおかれている状況や要望などを紹介すると同時に、当事者の自助的活動を促進する素材として小説を用いる方法を提案した。アスペルガー症候群者にとってインターネットは、定型発達者との関係性を「援助・被援助」から単なる「情報交換」へと変換するツールであると同時に、文芸作品などの活用とあわせて自助的活動を画期的に促進させる可能性をもつといえよう。

8. おわりに

定型発達者を装う／装わないが、当事者の自由な選択にゆだねられていることはいうまでもない。しかし、その判断をアスペルガー症候群者が行なうためには、定型発達者が無意識に対人関係においてとっている行動とその状況についての解析が不可欠である。定型発達者がアスペルガー症候群者を研究するのではなく、アスペルガー症候群者に定型発達者を研究してもらうための環境設定や方法を提案していくと同時に、定型発達者が自身の属する社会や対人姿勢を内省し分析した成果をアスペルガー症候群者に対して示すという流れなども今後は期待したい。

注と参考文献

- 1 「望ましくない」は原典”Stigma:Notes on the Management of Spoiled Identity”において”unwelcome”と表現されており、ゴッフマンがいうところの「われわれ＝常人」にとってunwelcomeな特徴がスティグマである。
- 2 アーヴィング・ゴッフマン (1993)『スティグマの社会学 ―烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房, pp.15.
- 3 ゴッフマンはスティグマのある人との対比において「常人」という表現を用いているが、本論ではアスペルガー症候群者の対称となる概念として一般に用いられている「定型発達者」を使用する。
- 4 アーヴィング・ゴッフマン (1993)『スティグマの社会学 ―烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房, pp.55.
- 5 ニキリンコ (1999) 自閉連邦在地球領事館附属図書館, 「軽度障害と障害の証明義務」, <http://homepage3.nifty.com/unifedaut/shoumei.htm>
- 6 澁谷智子 (2005) 「声の規範:「ろうの声」に対する聴者の反応から」『社会学評論』, 56(2), pp.435-451.
- 7 アーヴィング・ゴッフマン (1993)『スティグマの社会学 ―烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房, pp.13.
- 8 Chargeup (2005) テラ・インコグニタの果て (アメブロ版) (旧題:アスペルガー症候群と診断されました), 「考え方を変えなくてよい」2009-08-30 21:20:57, <http://ameblo.jp/chargeup/>
- 9 木村 晴美, 市田 泰弘 (1996) ろう文化宣言―言語的少数者としてのろう者 (聾文化宣言), 『現代思想』, 24(5), pp.8-17.
- 10 ニキリンコ (1999) 自閉連邦在地球領事館附属図書館, 「障害を文化と考えるのは、実用的」, <http://homepage3.nifty.com/unifedaut/bunkajitsuyou.htm>
- 11 ソーシャルスキルトレーニング (SST) とは、統合失調症患者を主な対象として病院などで行なわれている、アメリカの研究者リバーマンが考案した社会復帰のための生活技能訓練である。認知行動療法のひとつとされており、モデリングやロールプレイなどを指導者のもと集団で行なう。今日では、発達障害者を対象としたものもあり、学校教育などにおいても実施されている。
- 12 服巻智子編著 (2006)『自閉症スペクトラム 青年期・成人期のサクセスガイド』クリエイツかもがわ, pp.85.
- 13 アーヴィング・ゴッフマン (1993)『スティグマの社会学 ―烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房, pp.150-151.
- 14 とうふ (2006) アスペルガー社会人の Blog, 「パーティーで話に行っても良いタイミング」, 2009-11-08, <http://welladjust.exblog.jp/>
- 15 リアン・ホリデー (2002)『アスペルガー的人生』東京書籍, pp.53-54.
- 16 ジェイン・オースティン (2003), 中野康司訳『高慢と偏見』ちくま文庫. イギリスの田舎のジェントル階級における社交生活を描写した小説。ベネット家の5人娘 (ジェーン、エリザベス、メアリー、キティ、リディア) を中心とした、若い女性たちの種々の日常のエピソードを描いた秀作。
- 17 シャーロット・ブロンテ (1847)『ジェーン・エア』. ヴィクトリア朝のイギリスを舞台に、強い意志をもった女性である孤児ジェーンの半生を描いた物語。成人後のジェーンは、住み込みの家庭教師先の主人であるロチェスター氏と重婚しそうになるが、一旦は逃れ、ロチェスター夫

人が火事で亡くなった後、正式に結ばれるという小説。

18 エミリ・ブロンテ (1847) 『嵐が丘』. 19世紀初頭のイギリスのヨークシャー州の荒野を舞台にした、孤児ヒースクリフと養家の令嬢キャサリンとの間の3世代にわたる愛憎の物語。

19 服巻智子編著 (2006) 『自閉症スペクトラム 青年期・成人期のサクセスガイド』 クリエイツかもがわ, pp.123.

20 クロード・レヴィ=ストロース (1972) 『構造人類学』 みすず書, pp.228-256.

21 クロード・レヴィ=ストロース (1972) 『構造人類学』 みすず書, pp.228-256.

22 『高慢と偏見』 上 20pp. (第3章)

23 『高慢と偏見』 上 pp.20 (第3章)

24 『高慢と偏見』 上 pp.20 (第3章)

25 『高慢と偏見』 上 pp.31 (第4章)

26 『高慢と偏見』 上 pp.113 (第13章), 上 pp.184 (第19章) など。

27 『高慢と偏見』 上 pp.185 (第51章)

28 『高慢と偏見』 上 pp.338 (第35章)

29 『高慢と偏見』 上 pp.175-176 (第18章)

30 ジェーン・オースティン (2004) 『ジェイン・オースティンの手紙』 岩波書店, pp. (1813年1月29日の手紙)

31 『高慢と偏見』 上 pp.324-325 (第18章)

32 『高慢と偏見』 下 pp.139 (第47章)

33 『高慢と偏見』 上 pp.131-132 (第16章)

34 『高慢と偏見』 上 pp.135 (第16章)

35 『高慢と偏見』 下 pp.12 (第36章)

36 『高慢と偏見』 下 pp.41 (第40章)

37 ケネス・ホール (2005) 『ぼくのアスペルガー症候群 もっと知ってよぼくらのことを』 東京書籍. pp.35-37.

38 「べてるの家」とは、北海道浦河町にある精神障害者施設の名称であり、浦河町には授産施設やグループホームなど地域全体に精神障害者の活動拠点が広がっている。「三度の飯よりミーティング」「弱さを絆に」「安心してサボれる会社づくり」などのキャッチフレーズとともに、ミーティングの様子や生活風景、当事者に対するインタビューなどを当事者自身の手でビデオや本にして販売しており、こういった活動は「当事者研究」として全国的に有名となった。

39 狸穴猫 (林麻実) (2006) アスペルガーライフ, 「自閉症者のための定型発達者研究」, <http://asperger.maminyan.com/teikei.html>